

# 2023年10月例会・国際交流講演報告

日時 2023年10月14日(土) 今井館聖書講堂

場所 今井館聖書講堂

去る2023年10月14日(土)に、今年度の国際交流となる10月例会が今井館聖書講堂で行われました。太田雅孝会長による挨拶のあと、国際交流に先立って第7回「新しい詩の声」授賞式が行われました(詳細は「詩界通信」105号をご覧ください)。続いてあおい満月氏(習志野市)、渋谷眞砂子(坂戸市)によるスピーチと自作詩の朗読が行われました。

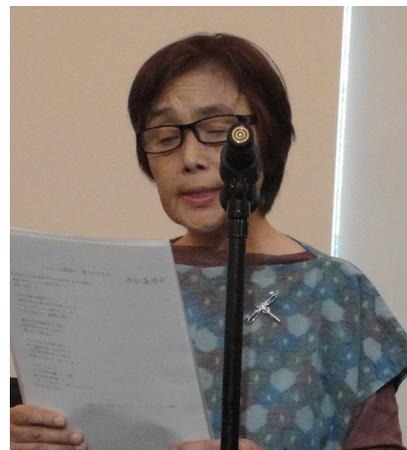
《朗読者と朗読作品》(敬称略)

あおい満月 「膜切り」「朝明け」「花火」

渋谷眞砂子 「ジョニーは戦場に 残されたまま」・同英語詩「Johnny has stayed in the battle field」



あおい満月氏



渋谷眞砂子氏



ピーター・J・マクミラン氏



講師紹介  
清岳こう氏

## ピーター・J・マクミラン氏の「万葉集の全訳について」

今回の講師ピーター・J・マクミランさんはアイルランド出身で、同国のユニバーシティ・カレッジ・ダブリン大学院で哲学の修士号を取得後、アメリカで英文学の博士号を取得し、プリンストン、コロンビア、オクスフォードの客員研究員を務められた方です。来日後は杏林大学教授、東京女子大学講師を歴任し、現在は相模女子大学客員教授および東京大学の非常勤講師を務めていらっしゃいます。非常に日本語に堪能で、講演も日本語で行われました。

司会は花潜幸氏、そして清岳こう氏がマクミランさんを紹介してくださいました。また講演中の『万葉集』の日本語原文の朗読は原詩夏至氏が引き受けてくださいました。参加者は51名、講演後には活発な質疑応答も行われました。

講演のタイトルは、「万葉集の全訳について」。今マクミランさんが最も熱く関わっている「万葉集の旅プロジェクト」の紹介に続いて、万葉集の魅力について語ってくださいました。以下、その内容を簡単にまとめてみたいと思います。

はじめにまず、7分ほどの動画が紹介されました。そこでマクミランさんは万葉集の全訳に取り組もうと決心した経緯を語っています。周知のように万葉集には4500首以上もの和歌が収録されており、その全訳はたいへんな仕事になります。しかしマクミランさんは元号が令和に代わったことを契機に、この遠大な作業に取り組もうと決心されました。なぜ万葉集のような昔の文学を訳すのか、と問われて、マクミランさんは、これが人類にとっての重要な遺産であるからと断言します。

さらにこの動画の中でマクミランさんは文学巡礼プロジェクトについても語っています。万葉集の歌碑は全国に2300基ほどあるそうですが、それらを巡って万葉集の世界に浸るのが文学巡礼です。ところが歌碑に書かれていることは日本人にとっても理解するのがむずかしいにも関わらず、ほとんどの場合説明や解説もないことを残念に思っていた

とのこと。そこで、マクミランさんは歌碑の横にわかりやすい看板を設置するというプロジェクトを2021年に企画しました。そのときは、27の看板が完成したに過ぎなかったため、さらに多くを完成させて、日本全国で『万葉集』の巡礼ができるようにしたいというのが、マクミランさんの計画です。看板には、原文と現代語訳のほかに、解説や英訳も添えられています。そして単に看板を立てるだけでなく、歌碑にまつわるサイトやリーフレットも作成し、旅に役立てようというものです。

マクミランさんはすでに『英語で味わう万葉集』という本を出版されていて、その際に80首を訳されています。しかし全訳のためには膨大な調査研究が必要で、万葉集の専門家である筑波大学の茂野智大氏をはじめとする多くの研究者や編集者の協力を得たうえで、年間450首を訳し、10年で完成させる計画だそうです。

さて肝心の『万葉集』の数々の歌の内容ですが、マクミランさんはいくつかのポイントを示しつつその特徴について語られました。

まずマクミランさんが取り上げたのが、『万葉集』に見られる「呪術的な世界観」です。万葉歌人たちは現実世界を超えた、向こう側の世界をも見通していたとマクミランさんは語ります。そしてそこに故郷のアイルランドにおける古代文明との共通点も見出しています。例えば、以下のような句です。

「弥彦／神の麓に／今日らもか／鹿の伏すらむ／かほごろも着て／角つきながら（弥彦の神の麓に、今日も鹿が伏していることだろうか。皮の衣を着て、角をつけたままで）」

弥彦山は古来から信仰されていた山で、この歌では弥彦山を神に見立て、鹿は神に仕えるため、皮の衣や角できちんとした姿をしているという意味です。ここから当時の人々が自然をどう捉えていたのかがわかるというのがマクミランさんの見立てです。

一転して「現代社会の話題」というテーマでは、今と変わらない子どもの貧困や自殺、過労死、LGBTQの愛も万葉集のなかで詠われていることが指摘され、ここでもさまざまな歌が取り上げられました。例えば以下のような歌です。

「昨日こそ／君はありしか／思はぬに／浜松の上に／雲にたなびく（昨日は君はこの世に存在していたのに、思いもかけず今は浜の松の上で雲になってたなびいている）」

この歌は、天平時代のある官吏が自殺した際に、上司であった大伴三中が詠んだものとされています。自殺の原因はわからないものの、当時の過大な業務がその一因であったかもしれないとマクミラン氏は考えています。まさに過労死です。

続いてマクミランさんは、大伴家持の「我が背子は／玉にもがな／ほととぎす／声にあへ貫き／手に巻きて行かむ(あなたが玉だったらいいのに。それならほととぎすの声といっしょに糸に通して手に巻いていこう)」を取り上げましたが、これは家持が越中から奈良に向かう際に部下の大伴池主に送った歌とされています。この歌には返歌もありますが、この二人がかなり親密であったことが伺えます。ここから性に寛容であった当時の日本を読み取り、LGBTQの問題へのヒントになるかもしれないとマクミランさんは語りました。

あるいはまた、貧窮の実態と世の不条理を生々しく描いたものとして、山上憶良の「貧窮問答歌」が紹介されました。そこに加えられている反歌には、「世の中を／うしとやさしと おもへども／飛び立ちかねつ／鳥にしあらねば（世の中は厭なものだ、恥ずかしいものだと思うけれど、飛び去ることもできない。鳥ではないのだから）」というものがあ

りますが、この歌にはそこから逃れられない諦めの境地が語られています。

「翻訳を通して、戦争で悪用された万葉集を正す」では、大伴家持の、「海行かば／水漬く屍／山行かば／草生す屍／大君の／辺にこそ死なめ／かへり見はせじ（海を行くなら水に浸かった屍、山を行くなら草むした屍になるとしても、大君のお傍で死のう。我が身を顧みるようなことはしない）」を取り上げ、本来は長歌であるこの歌のこの部分だけが切り取られ、戦時中に国民の戦意高揚に利用されたことが指摘されました。この歌も大伴家持の作ですが、ここに見られる誓いの言葉は、あくまで武門の家である大伴氏ならではのものであって、決してすべての人々が心に刻むべきものとして語られたものではないというマクミランさんの指摘は大事なポイントでしょう。

「現代の歌人」というテーマでは、万葉集を本歌取りとした現代詩人の句がいくつか紹介されました。例えば山上憶良の句に、「瓜食めば／子ども思ほゆ／栗食めば／まして偲はゆ／いづくより／来たりしものそ／まなかひに／もとなかかりて／安眠しなさぬ（瓜を食べると子どもたちのことが思い出され、栗を食べると、さらに偲ばれる…）」という歌がありますが、現代歌人の塚本邦雄はそれをふまえて「雉食へば／ましてしのばゆ／再た娶り／あかあかと冬も／半裸のピカソ（雉を食べると、さらに思い出される。くりかえし結婚し、あかあかと輝いて冬でも半裸で過ごしているピカソのことが、思い出される）」と詠んでいます。

同じ山上憶良の「銀も／金も玉も／なにせむに／優れる宝子に／及かめやも（銀も金も珠玉も何になろうか、すばらしい宝である子どもには及ぶまい）」からは、同じく塚本邦雄の「夏三日月／子を金銀に／たぐへたる／歌ありき／ゆめ／うたはざらむ（夏の三日月子どものことを金や銀に比べる歌があった。私は決してそんな歌はつくらないぞ）」という歌も生まれています。『万葉集』がこのように現代につながっているというのも興味深いところです。

マクミランさんは、日本語における同音異義語にも触れています。このような言葉遊びと連想は日本文化に欠かせないものだけれども、英語には同音異義語が少なく、真似ができないということです。そしてこの同音異義語は『万葉集』の時代から文化的、創造的なものとして生かされてきたということマクミランさんは強調します。

最後に柿本人麻呂のこの句が紹介されました。「磯城島の／大和の国は／言霊の／助くる国ぞ／ま幸くありこそ（磯城島の大和の国は言霊が助ける国です。ご無事であってください）。この句を受けて、「言霊の力は、詩人にとって一番大切なことです。私は、万葉集の全訳プロジェクトを通して、言霊の世界を蘇らせたいと考えています」とマクミランさんは講演を締めくくられました。

（文責・例会・国際交流担当理事 丹羽京子）

「詩界通信」106号より転載